

A comparison of clinical protocols for assessing postoperative fecal continence in anorectal malformation

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード: 作成者: 越智, 崇徳 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001579

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1516 号

A comparison of clinical protocols for assessing postoperative fecal continence in anorectal malformation

(鎖肛における根治術後排便機能評価法の比較・検討)

越智 崇徳 (おち たかのり)

博士 (医学)

論文内容の要旨

鎖肛においては、根治術後の長期的な排便機能が問題となる。今日まで、様々な術後排便機能評価法が考案されているが、統一された評価法はなく、また各々の評価法の妥当性について言及した報告はない。本研究は、現在広く用いられている4つの術後排便機能評価法を比較検討し、評価法の妥当性、問題点を提唱し、新たな術後排便機能評価法についての指針を示し、患児の病態把握や新しい術式の開発に貢献することを目的とした。

1995年から2007年の期間に、鎖肛と診断され根治術が施行された111例のうち、4歳以降まで経過観察を行った59例を対象とし、4歳時及び7歳時における排便機能を、Kelly score、日本直腸肛門奇形研究会 score、Holschneider score、順天堂 score の4つの評価法を用いて後方視的に評価し、各評価法における排便機能を新たに、good、fair、poor、very poor の4段階に定義して比較・検討した。

4歳時に評価した59例の内訳は、男児高位鎖肛:23例、男児低位鎖肛:12例、女児高位鎖肛:7例、女児低位鎖肛:17例。その内、7歳まで経過観察され評価できた症例は27例で、内訳は、男児高位鎖肛:11例、男児低位鎖肛:5例、女児高位鎖肛:5例、女児低位鎖肛:6例であった。4歳時と7歳時の計86評価のうち、評価法間で評価が2段階以上離れていたのは7評価(8.1%)あった(男児高位:5/34, 男児低位:1/17, 女児高位:0/12, 女児低位:1/23)。評価は1段階差であるが、臨床的に問題となるfairとpoorの間で解離を認めたものは10評価(11.6%)あった(男児高位:8/34, 男児低位:0/17, 女児高位:2/12, 女児低位:0/23)。

以上の結果から、男児高位鎖肛では他病型に比べて、評価法毎による解離が大きく、評価が妥当とは言えない。今後、男児高位鎖肛においては、根治術後排便機能評価法を適正化、標準化する必要性が示唆された。